

船での事

深夜の書斎の中で僕は夕方の船での事を検証してゐる
結局 あれから小雨はまだ降りつづいてゐる
一本のビニールの傘に身を寄せて船つき場まで行つた
途中で僕は急にしやがみこんだ
砂利の道に落ちてゐた翅の濡れた蟬を手中にした
僕はすぐ立ちあがってお前に追ひついた
「どうなさったの」と聞かれても僕は答へなかった
大きな波が窓のすぐ側でもりあがり
うすよごれた鉛色の水がお前の頬の近くにゆれてゐた
「はじめてあつた時みたいだね」
不思議さうに僕を見上げるお前の目
「秘密を持つてはいやよ」
僕の上衣のボタンに小指をかけながらお前は言つた
大勢の雑多な客のあひだにあつて僕たちの時間は過ぎてゐる
船内放送がしやがれた声で言つた
「危険な際には案内にしたがつて慎重に行動して下さい」
「あの時気分でもわるくなつたのかと思つたのよ」
しばらくのあひだ僕とお前の心はしつくりといかなかつた
僕の秘密はポケットの中の蟬
もしかするとお前の言ふ僕の秘密
あの蟬は僕の別の女といふことなのだ
ああ お前
僕たちは危険な際に直面してゐる
慎重に行動しなくてはならない